

編集後記

時が経つのは早いもので、今年ももうすぐ終わりです。冬らしいと言いますか、そうでもないと言いますか、妙な気分がするこのごろの気候です。IAM 会員の皆さん、お元気ですか。今年も NPO 法人として活動できましたのも、皆さんのお蔭と心より感謝申し上げます。

本年最後のわが研究所の紀要(機関誌)をお送りします。研究員の皆さんの研究成果を年間4回にわたって発行する、この紀要には、多くの会員ならびに講演記録が掲載されております。今年も多くの力作を掲載することができ、心より感謝申し上げますとともに、今後ご協力のほどをよろしくお願いいたします。

さて、*e-Magazine* も今回で第15号となりました。かつて社会経済学者の J.A. シュンペーターが指摘しましたように、ある現象を理解するには、理論と現実と歴史の三位一体となった見方が必要である、との趣旨に則り、わが研究所も常に現実を理解していただくために、理論を背景にもって現実をとらえ、事実の連続的過程としての歴史的な見方を重視するとい観点に立っております。そこで、可能な限り歴史的な、あるいは現代につながる過去に光を当て、現実の理解に役立てようと考えております。そうすることで、より正しい判断に行きつくため、表面的な理解から重厚な理解へとつながり、より深い理解に結び付くことが可能になると考えております。たとえば、最近の中国は何をしようとしているのか、これから何を目指そうとしているのか、タイの民主化はなぜ後退したのか、台湾や韓国の民主化はどの程度発展したか、さらには民主化の後退や不安定化は経済にどう影響しているのか、などと言った問題は、直接そうした問題を扱う記事や論文に、どこかでお目にかかるかもしれません。しかし、別の角度から、さらには歴史的視点に立って見れば、別の見方が可能となり、より正しい見方に行きつく可能性もあるわけです。そういう意味で、われわれは狭い知識から脱却して、幅広い角度から、幅広い知識に基づいて、現実を見ていかないと、変化極まらない現在の国際社会を正しく見ることは難しいでしょう。

最近アジア諸国も経済が成長し、豊かさを増すにつれ高い教育を受ける人も増え、インターネットが普及するなど、知識や情報が豊富になって、人々の考え方も複雑化し、単純な見方では間違いを犯しやすいのではないかと考えます。日韓関係、日中関係ばかりか、最近のトルコとロシアのように隣国との関係がぎくしゃくしているケースは世界中にいくらでもあります。それもさかのぼれば、たとえばトルコとロシアの対立は、表面より奥深いところに真の原因があるのかもしれません。たとえば、両国はかつて露土戦争(1877年 - 1878年)を戦いました。露土戦争は、ロシア帝国とオスマン帝国(トルコ)の間で起こった戦争のひとつですが、そこでトルコは敗北を喫したため、日露戦争では日本の勝利を喜んだとの話もあります。むろん、それも憶測にすぎませんし、もうとつくに多くの国民は忘れたかもしれません。

しかし、そうした隣国間での対立を我々が、新聞報道やテレビ、インターネットでの表面的な知識で判断すると、とんでもない間違いを犯す可能性があります。われわれにとって、どれだけ深い知識に基づいた、ソフィスティケート(洗練)された見方ができるかが重要だと考えます。

そうした観点から、今回も理論と現実と歴史を扱う論考を掲載できましたので、年末年始にゆっくりした時間を使って、ぜひ一読し、じっくり考えてみてはいかがでしょうか。そういうことで、ここでは、掲載した論考に逐一コメントや説明を加えることはやめましょう。皆さん自身が自由に読み、考え、そこで感じたことを、できましたらぜひ率直に感想なり批評として、送っていただければ、執筆者への励みにもなりますので、よろしく願いする次第です。これが毎回、忙しい中を苦勞して原稿を書いていただく執筆者から出される、心からの要望でもあります。

今年の冬は暖冬ともいわれますが、寒いことに変わりはないでしょう。そういうことで、しばらくは寒い日が続きます。また、様々な血なまぐさい事件が相次ぐ中で、元気で楽しい新年を共に迎えたいと思います。なお、次回の *e-Magazine* 第16号は2016年3月を予定しております。ご期待ください。(朽木)